

【100周年記念事業】春の歓迎バーベキューデーを開催しました

法人創立100周年記念事業「四季のイベント」の一環として、2024年4月20日(土)に前田キャンパス構内で「春の歓迎バーベキューデー」を開催しました。

「四季のイベント」の「春」として初開催し、当日は学生、教職員、北海道科学大学高校の生徒・教員、併せて約720名が参加しました。新入生・新任教職員を歓迎するために、多くの方が前田キャンパスに集い、部活動やクラブ・同好会、学科など幅広いグループ毎にコンロを囲み、法人内全体の交流の輪が広がる機会となりました。

今回のイベント開催にあたり雪嶺会・親交会・協学会から多くの寄付をいただき、新入生の参加費を無料として開催しました。



法人創立100周年記念事業寄付金ご協力のお願い

2024年8月10日(土)に法人創立100周年を迎えます。今年の法人創立100周年記念事業では、本法人が今後目指す「次の100年」を社会に発信するべく、多くの方の想いが反映されるよう諸事業の展開を計画しています。4月20日(土)には春の歓迎バーベキューデーを開催、6月24日(月)には系列校である北海道自動車学校の開校100周年記念式典を開催しました。今後は8月10日(土)に札幌文化芸術劇場(hitaru)で100周年記念セレモニーを実施するほか、春夏秋冬の四季のイベントを実施します。

つきましては、諸事ご多端の折、誠に恐縮に存じますが、寄付の趣旨にご賛同していただき、卒業生、保護者、地域社会の皆様からのご支援、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。2023年度末で、累計152,475,000円の寄付を賜っております。

皆様からのご厚志に心より感謝申し上げます。

応募期間	2025年 3月31日まで	応募の対象	個人の方 「一般有志・卒業生・保護者・教職員」 一口につき5千円	法人の方 「企業・団体」 一口につき5千円
------	------------------	-------	--	-----------------------------

寄付の詳細につきましては、法人創立100周年記念事業寄付金サイトにてご確認ください。

法人創立100周年記念事業寄付金サイト > <https://ed.hus.ac.jp/100th/donation/>

こちらからも
ご確認いただけます



北海道科学大学 HUS NEWS LETTER 2024年7月31日(第221号)



〒006-8585 北海道札幌市手稲区前田7条15丁目4-1
TEL: 011-681-2161(代表) FAX: 011-688-7639(代表)
HP: <https://www.hus.ac.jp/>

+Professional

ヒューマニティ、コミュニケーション力、課題発見解決力、自己実現力といった基盤能力を基に、専門性を身につけた人材を育成します。すべての設置校に共通する、わたしたちのスローガンです。

〒006-8585 北海道札幌市手稲区前田7条15丁目4-1
北海道科学大学
北海道科学大学高等学校
北海道自動車学校



SPECIAL FEATURE.1

特集 1



1931

北海道自動車学校が北海道協立自動車学校に改組。写真は当時の教習コース。

1926

開学当時から教習車両として使用されたT型フォード。T型フォード再生プロジェクトにより、2021年に復活!



1924

伏木田隆作が本法人の始まりである自動車運転技能教授所を設立。



HUS 調査隊

が理事長に聞く!

学生時代から歴史を見続けてきた苦米地理事長に、



学校法人北海道科学大学
理事長 苦米地 司

1953年生まれ、青森県出身。北海道工業大学工学部建築工学科を卒業後、工学博士を取得して大学に復帰。2011年に北海道科学大学学長に就任し、2017年より現職。

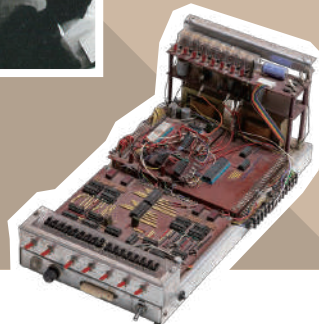
1972

北海道工業大学の土木工学科新設時に寄贈されたトランシット(測量器)。



1979

パーソナルコンピューターが市販される前年に本学の教員が制作した手作りマイコン。



1981

本学が初めて発行した入試問題解説。



1987

大学の電話機として使用されていた黒電話。



1982

北海道工業高等学校軟式テニス部が第7回全日本高校団体選抜大会で初優勝し「軟式テニス」誌の表紙を飾る。



1989

この年から販売され、前学長が愛用していたMacintosh SE/30。

1998

北海道工業大学大学祭「道工大祭」で建てられたやぐら。



1991

北海道工業高等学校自転車競技部がインターハイ全国大会3,000m個人追い抜きで6位入賞。



2000

「北海道と共に-大成建設&北海道工業大学」としてYOSAKOIソーラン祭りに出場し、力強く演舞。

2009

HITプラザで「HIT寄席」を開催。柳家 三三さんによる落語、鏡味仙三さんによる曲芸を披露。



2014

マスコットキャラクター「かがくガオー」誕生。



100年ヒストリー

“これまで”と“これから”を教えてください。

まずは100年前、学校法人北海道科学大学はどんな学校としてスタートしたのですか?

当時の北海道は馬車での移動が主流で、自動車はわずか136台しか走っていなかったそうです。そのような時代に、創立者の伏木田隆作は「これからはモータリゼーションの時代になる」と予感し、自ら東京に赴き運転免許を取り、個人で札幌市山鼻町に「自動車運転技能教授所」を開設しました。それが北海道初の自動車学校に認定され、1953年には日本初の自動車短期大学をつくり、黎明期は車にかかわる人材を育成する法人として成長してきました。

理事長も北科大の学生だったと聞きました。当時の大学は、どんな雰囲気でしたか?

私は青森県の高校を卒業して、建築工学科の1期生として入学したのですが、当時の大学には社会に出て何年か働いた後に改めて勉強したいと入学してきた人もいれば、4年制大学を卒業後に工学を学びたいと学部を変えて入学し直す人もいて、年齢層がとても幅広かったです。今のようになにでもある時代ではなかったので不慣れさや大変さもありましたが、集まってくる人たちの熱気と学びに対する想いにあふれていて、私も一生懸命に勉強していました。なかでも80ページもの卒業論文を徹夜しながら仲間と一緒に仕上

げたことは、今でも一番の思い出になっています。

卒業後に教員として大学に戻った理事長は多くの歴史を見届けてきたと思いますが、どんな100年だったと感じていますか?

色々なことを先取りして取り組んできた100年だったと思います。例えば、雪国の自動車は冬になるとスタッドレスタイヤに履き替えますが、その実用化には本学で行った実験が大きく寄与しています。キャンパス内にアイスバーンの路面を人工的に作ったり、ウトナイ湖にもコースを設けて多くのデータを蓄積し、実用化と性能向上に貢献してきました。また、今は温かくて住みやすくなった北海道の住宅の高気密化や高断熱化にも、本学が行ってきたメーカーや公的機関との共同研究が活かされています。これまでの100年には、そうした北海道が抱える様々な課題に取り組み、解決してきた実績があり、地域に密着して歩んできた歴史に強い誇りを感じています。

そんな歴史があったんですね。

一方で、ずっと変わっていないことはありますか?

いくつもありますが、一つ挙げるなら大学から見える手稲山ですね。これは学生の頃から今も変わっていません。昔は手稲駅からキャンパス

が見えたくらい、この辺りには何もなかったのが、今ではすっかり住宅街になって、手稲山からの景色は大きく変わりましたね。

100年の歴史の中で、2世代、3世代でかかわっている人もいますよね?

2世代で学んでいる人はたくさんいますよ。お祖父さんが自動車短期大学の卒業生で、お父さんが北海道工業大学の卒業生という3世代にわたって本法人とつながっている在学生もいます。歴史を重ねていくことで、これからもどんどん増えていくことを期待しています。

100周年を迎えて、これからどんな未来を描いていくのでしょうか?

本法人はこれまで、北海道とともに成長してきました。北海道にはこれからもさまざまな地域課題が生まれてくると思いますが、それらに対応できるよう学校運営を進めています。なにより、北海道を熱くする人材を育成する学校法人であり続けることを大切に、歩んでいきたいと思っています。

2023

学校法人北海道科学大学創立100周年を記念し、図書館を改修した「100周年記念会館『HUS+H』」がリニューアルオープン。



2017

北海道科学大学開学50周年を記念し、シンポジウムを開催。

2018

日産自動車株式会社より貸与された電気自動車e-NV200。2018年に発生した地震でのブラックアウト時に、電源として活躍。



取材を終えて一言!



北海道と共に発展していく北科大、学生も成長します!
未来デザイン学部
メディアデザイン学科 4年
平間 海人さん



先人の方々の熱い想いに心打たれました。
未来デザイン学部
メディアデザイン学科 4年
蔵前 萌那さん



本学の長い歴史が更に発展していくのが楽しみです。
未来デザイン学部
メディアデザイン学科 2年
鈴木 菜友さん

HUS 調査隊 の活躍は P.10 をご覧ください!



2024年4月

もっと地域とつながる大学に 地域共育センター発足

本学に新たに誕生した「地域共育センター」とはどんな組織なのか？
センター長を務める山下教授に本学が目指す地域連携の未来について伺いました。



地域共育センター長
薬学部 薬学科
山下 美妃 教授

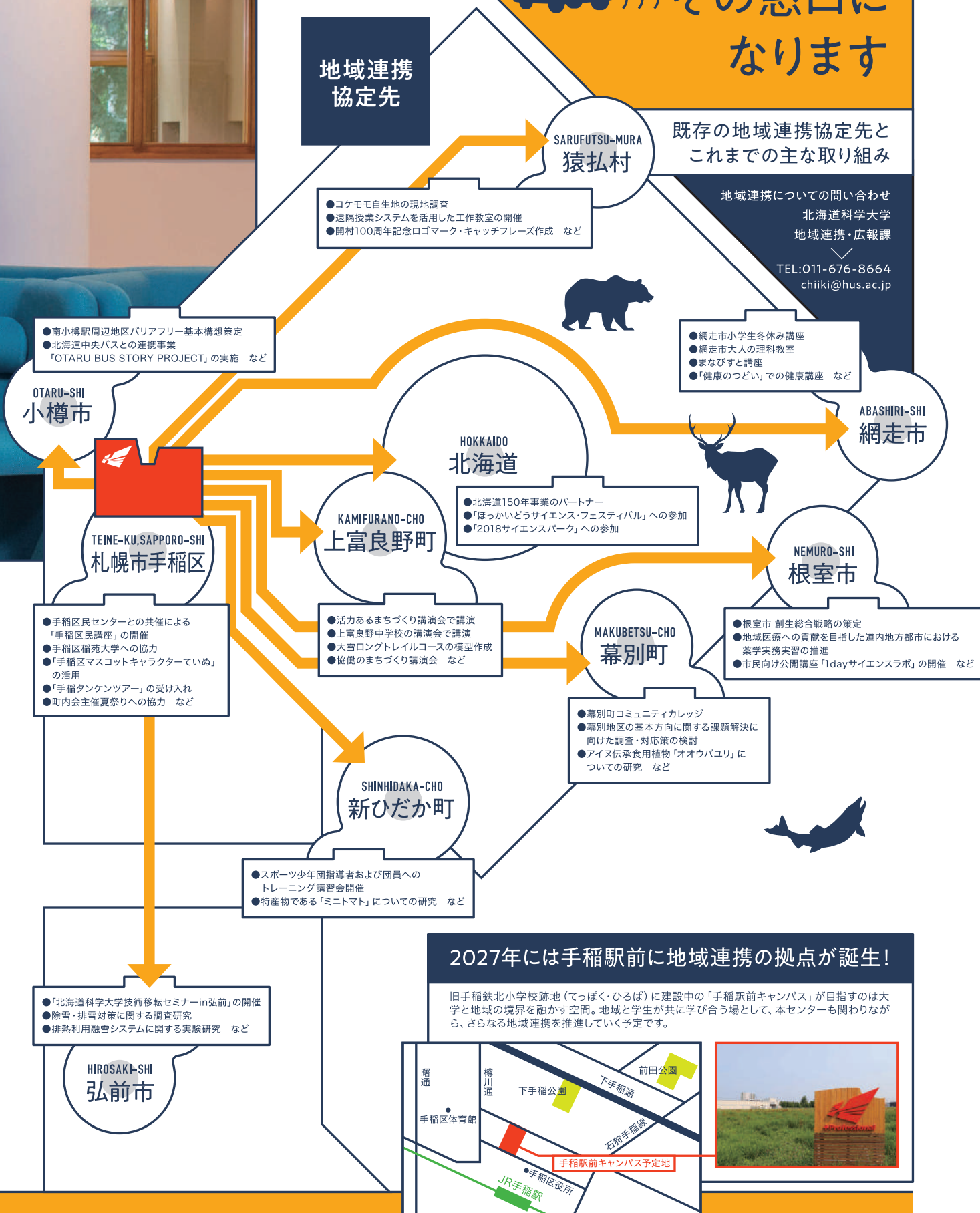
建学の精神として「地域社会の活性化に寄与する」ことを使命としている本学では、「地域社会への貢献」を基本理念に、これまでさまざまな地域との連携事業を展開してきました。その輪はキャンパスのある札幌市手稲区はもちろん、北海道内のさまざまな市町村、さらには青森県弘前市まで広がっています。学校法人北海道科学大学が創立100周年を迎える今年、本学は新たに「地域共育センター」を設立し、地域連携の歩みを次なるフェーズへと進めます。

これまでの地域連携は、どちらかというと公開講座や講演といった本学の教職員や学生が地域へ出向いて教える教育的要素の強いものが多くありました。ですが、これから進める地域連携は「教育」ではなく、「共育」。本学のリソースを提供するだけでなく、地域全体を学びの場として、私たちも地域と共に成長させてもらいながら、地域の発展・成長に貢献していく。双方向に学び、教わり、成長できる関係を築き、その上で地域に貢献できる人材を育む「共育」を目指していきます。「地域共育センター」は、その地域との共育を推し進めるための専門組織です。

本センター発足後、これまで行ってきた地域貢献活動を振り返り、本学ができる地域貢献とは何かを改めて見直し、既存の連携協定先とのさらなる関係強化と連携先の拡充に向けたロードマップを策定しているところです。さらに教職員が個々に行っていた社会貢献活動や地域とのつながりについても整理・集約を図っており、今後は「地域共育センター」が地域との窓口として機能していくための体制づくりを進めています。

本学には雪を夏季の空調として活用する研究を行っている先生もいれば、シカよけの笛や屋根の落雪防止について研究している先生もいます。北海道という地域と向き合い、そこでの暮らしを良くするための研究が多く行われているのが大きな強みです。本学が有する工学部、薬学部、保健医療学部、未来デザイン学部は北海道の地域が抱えるさまざまな課題に関連があり、それらの多くに対応できる場所も強みの一つだと思っています。地域の皆さまには、どんなことでも期待してほしいですし、気軽に頼って相談してほしいと願っています。

地域に“とことんひらく”
センターが
その窓口になります



写真部

PHOTO CLUB

写真が好きな人なら大歓迎。

自分だけの“最高の一枚”に出会うため、

みんなで楽しく精力的に活動中！

カメラがなくてもスマホでOK！
楽しみながら写真の腕を磨こう！

目の前の光景を手軽に瞬で切り取れる写真の魅力にひかれ、高校生の頃からカメラを始めました。親に買ってもらったカメラからスタートし、撮りたいものが増えていくたびにアルバイトをしてレンズなどを買いそろえていきました。

そんな私が部長を務める写真部は、カメラ歴の長い部員から、大学に入ってからカメラを始めたという初心者まで、写真が好きな人たち約70名が集まっています。自分のカメラを持っていなくても部内の貸しカメラを使えますし、スマートフォンで撮っている部員もいる自由な部です。

普段の活動では風景や人物、車や電車など、各部員が好きなものを撮っています。被写体が同じ人同士は話が合うので自然と仲良くなるようです。先輩から後輩にアドバイスしたり、同学年の部員が意見を出し合ったりして、みんなで技術を磨いています。

月に1回は撮影会を実施していて、円山公園など近場は現地集合・現地解散で、小樽や恵庭溪谷などの近郊へは、車を出せる部員がいれば分乗して向かいます。現地に着いたらある程度はまとまって動き、その後は各自撮りたいものを探して別々に行動します。また、昨年は3年ぶりに開催された東北工業大学との総合定期戦に帯同して記録写真を撮る担当。私自身はSDカードのデータがクラッシュするトラブルに見舞われたのですが(笑)、一緒に帯同した部員たちが頑張ってくれました。

そのほか、写真展も1～2カ月に1回のペースで開催しています。中でも5月の展示会は、新入生に設営・搬出、印刷や写真の並べ方などを体験してもらったり、新規の部員を勧誘する大事な機会になっ



ています。規模が大きいのは2月下旬から3月初頭
に実施する卒業展です。今年度はすでに日程や会
場も決まり、7月には撮影会も控えていて、現在は
準備をしている最中です。

いろいろな手法を自由に試して、
思うがままに撮ることが大事。

写真部では、体育祭や大学祭などの学内行事、
体育系部活の大会、オープンキャンパス用の部活
紹介写真を担当。さらに「YOSAKOIソーラン祭
り」の写真も毎年依頼を受けて撮影しています。
撮影を頼まれると部員のモチベーションも上がり、
技術の向上につながるので、これからもこうした機
会を増やしていきたいです。

部活動の良さは、自分の作品を本格的に印刷し
てベストな状態で発表できて、一般の人たちの目
に触れ、率直な感想や評価をいただけること。写
真展で在廊しているときに来場者の方から声を
掛けられたり、作品についてお話ができたときは
特にうれしいです。こういう経験は、個人で活動し
ていたらなかなか味わえません。

カメラを続けていると、物事をさまざまな角度
からとらえられるようになります。たくさん撮って
いくうちに「もっと上手になりたい!」という意欲が湧
き、斬新な構図を求めてあらゆるアングルを試す



ことで、挑戦する精神と芸術のセンスが養わ
れると思います。頭は使いながら、でもあまり
考え過ぎないでとにかくシャッターを切り続
けること。そうすれば自分だけの表現が見つ
かるはずですよ。

「旅行先で写真を撮りたいから貸しカメラ
を使いたい」という入部動機でも構いません。
まずは気軽に覗いてみてください。そうい
うちょっとしたきっかけから、
一人でも多くの方に写真に興味を持ってくれたらいいな
と思っています。

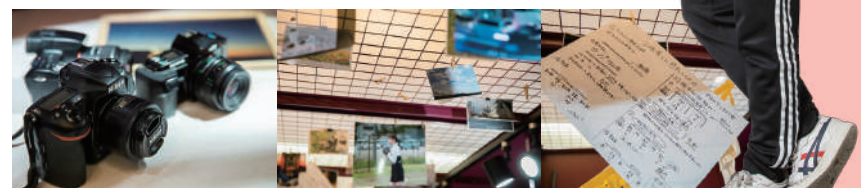
工学部
都市環境学科
4年生

部長
野田 真央さん



ACTIVITY CONTENT 活動内容

写真部では、個人での写真撮影や定期的な部全体での撮影会、展
示会を実施しています。カメラでの活動だけでなく、スマホでの撮
影、写真鑑賞もできます。



DATA

写真部

【部 室】 体育館 3階
【部員数】 70人
【発 足】 1968年



STUDENT ACTIVITY

学生の活躍

HUS CAMPUS NEWS 学内ニュース

2024年度
大学周辺町内ゴミ拾いを
実施しました！



詳しくは
こちらをご覧ください



薬学部学生2名が
特殊詐欺を防止し手稲警察署から
感謝状を授与されました



詳しくは
こちらをご覧ください



看護学科の学生が
「JENESYS2023 大学生訪韓団」
として訪韓プログラムに参加しました



詳しくは
こちらをご覧ください



木からお酒が作れる!? 経営者と技術者の “2つの目線”が生み出すイノベーションで 地域の中小企業を元気にする!

In the Laboratory 研究室

北科大で行われている
研究の最前線を
クローズアップ!



未来デザイン学部 人間社会学科
Sakai Toshifumi

坂井 俊文
准教授

地域企業が生き残るために、 新たな価値で市場を切り拓く “第2の創業”を!

――先生が研究テーマに掲げる「地域ものづくり
企業における戦略的イノベーション」とはどう
いったことですか?

地方の中小企業は規模や人材に限りがあるため、市場が変化して業績が落ちたり成長が鈍ってきた時は、販路を開拓・拡大するために、新規事業や新商品により、それまでになかった価値を生み出す「第2の創業」が必要になることがあります。

私は、地域企業が積み重ねてきた資産を生かして「第2の創業」を成功させるために何をしたらいいのか、また、地域に埋もれている資源や文化とどのように組み合わせればうまくいくのか、といったことを研究しています。

――この研究テーマを選ばれたのはなぜですか?

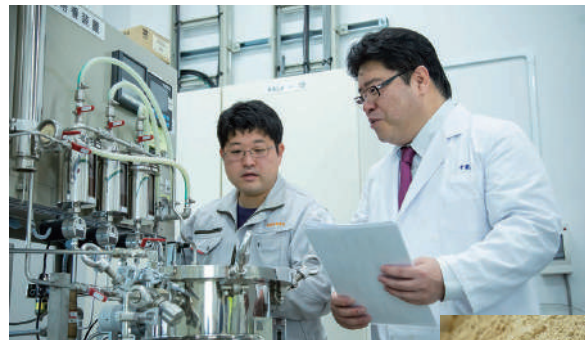
私が大学で土木工学を学んでいた頃、空知管内で建設会社を営んでいた父が他界したため、25歳で事業を引き継ぎました。技術者として現場に出ながら、経営者として3度の合併を経験し



研究室が貢献する
SDGs目標

坂井先生の研究室では地域の活性化や恒久的なまちづくりに貢献する研究に取り組んでおり、先生自身も再生可能エネルギー「木質バイオマス」の地域活用を考える検討会などに参加しています。

ました。その後、京都大学大学院で地域企業の戦略的展開を研究し、本学では経営学を教えていることから、「地域企業」と「ものづくり」の両面で高付加価値化や市場の開拓について研究しようと思い立ちました。



▲三原先生と共に木粉を糖化発酵させ、アルコールの生成状況を確認

アルコール生成に必要なセルロースを
取り出すため、独自製法で粉碎した木粉

道民に愛されるシラカバから 高濃度アルコールの抽出に成功。 現在、特許も申請中。

――現在はシラカバ材からアルコールを抽出する
研究に取り組んでいると聞いています。どの
ようなきっかけから始まったプロジェクトなの
でしょうか?

もともとシラカバの研究は薬学部の上原義広先生が行っていました。雪解けの早春に採取できるシラカバの樹液はほのかに甘く、古くから北海道民に親しまれてきました。三原先生がその甘さの秘密を探ろうと樹液の成分分析をしていたところ、シラカバ樹液の生産者の方から、木そのものからお酒を作ることはいかならないかと研究を依頼されたそうです。もともと私も大学時代の仲間を介して生産者の方と接点があったことから、三原先生から共同研究のお誘いを受けました。

――共同研究は具体的にはどのように進められた
のですか?

まずは原材料を調達するところから始めて、醸造装置や蒸留機は自分たちで大学の実験室に運んで設置し、木を粉末にする機械などは、地域の企業に交渉して使わせてもらいました。専門である成分分析も含め、ものづくりの細かい部分は三原先生を中心に進め、私はできたものを興味のある企業に売り込む方法を考えました。

――私たちが普段見ているシラカバの木からアルコールができるなんて、なかなか想像できないですね。

木材のチップをさまざまな機械に何度も通してミクロンレベルまですり潰すと、木の中にあるセルロースという炭水化合物が外に出て、糖化発酵できる状態になります。発酵でできた液体に熱を加えて蒸留すると、木由来のちよつと落ち着いた甘い匂いがする、無色透明なアルコールが抽出でき



ます。木から生成したアルコールは、安全性が確認されていないので飲むことはできません。工程もとても多く複雑なので、世界でもまだ実験段階です。しかし将来、木のお酒が市販されて木材の利用が進めば、国内林業の活性化につながるかもしれません。今後は、企業に活用してもらうための情報発信が課題となります。

――1番大変だったことは何ですか?

アルコールを生成するためには国税庁の酒造免許が必要ですが、お酒としての販路がないと許可が下りません。そこで、アルコールの度数を蒸留によって96%くらいまで上げ、実験に使う条件で、経済産業省が管轄する工業用アルコール

製造の許可を取りました。木から抽出したアルコールの度数をここまで上げたのは、おそらく私たちの実験室が初めてです。法律に則った製造ガイドラインの作成や許可申請などは、三原先生と一緒に行いました。

――さらに今回、特許も申請されたとか。

生成したアルコールを、他大学の先生に成分分析や香りの試験を経て評価していただいた結果と、木を最後まで乾燥した状態で粉末にする技術について特許を申請しました。製造から特許申請まで4年ぐらいかかっています。

地域に眠る“まだ見ぬ宝”が もたらす、正の波及効果。 その橋渡し役になりたい。

――今後はどういうことに取り組んでみたいと考
えていますか?

私のゼミの卒業生が手伝っているワイナリーから、アロニアという果実の有効活用について相談を受け、一緒に考えているところです。まだ具体化はしていませんが、新たな地域貢献のきっかけになればいいなと思っています。企業が元気になることで雇用が生まれて経済が発展し、地域が豊かになって公共サービスが向上し、人も住みやすくなる、というのが理想です。

地方企業の技術者として経営に携わる中で学んだのは、経営と技術のどちらもわかっていないと企業は成り立たないということ。これからの時代は技術者の素地を持って経営を学び起業する方が成功しやすく、社会からも求められるでしょう。

住んでいる人は意外と気づかない地方の眠っている価値を、私が「外からの目線」で見つけて引き出し、地方ならではの事情を理解した上で企業に現実的な提案をするハブのような役目を担っていきたいです。

HUS CAMPUS NEWS 学内ニュース

HBCにて放送された「SitakkeTV」
にて北海道科学大学高等学校と本学
の取り組みが紹介されました



詳しくは
こちらをご覧ください



メディアデザイン学科の学生が
制作した小樽市のショートフィルム
が公開されました



詳しくは
こちらをご覧ください



公開講座「秀友会アカデミア
(元レバンガ北海道 牧 全氏)」
を開催しました



詳しくは
こちらをご覧ください



GRADUATE VISIT

卒業生訪問

先輩の大学時代と
これからを聞く



アイン薬局 宮の沢店
管理薬剤師
つばた まゆ

津端 菜由
さん



Profile

釧路市出身。2008年3月に北海道薬科大学（現・北科大）卒業後、手稲溪仁会病院、株式会社ファルコファーマシーズ勤務を経て2013年9月に株式会社アインファーマシーズ入社。第一子産休育休後に同社宮の沢店に配属され、2023年6月より現職にて勤務。

患者さんと距離が近い存在の薬剤師。薬を出して終わりではなく、患者さんの「その先」に寄り添う。

私は管理薬剤師として薬局に勤務し、調剤や服薬指導などの業務を日々行っています。調剤といっても錠剤などの個数を数えてお渡しする係数調剤や分量を測って調剤する定量調剤があり、複数の薬をまとめて一袋にする一包化という調剤もあります。また、薬に関する相談や問い合わせに対応する“かかりつけ薬剤師”も任されていて、月に100人以上の患者さんを担当しています。患者さんと良好な関係を築き、信頼してもらうためには、誠実な対応の積み重ねが欠かせません。例えば、患者さんからすぐには回答が難しい質問があった際も決してごまかしたり、憶測で答えたりせず、時間がかかっても、調べてから答えるよう心がけています。

薬局で勤務していると、薬剤師は患者さんにとって最も身近な医療従事者の一人であると実感します。薬について個人的に相談されるのはもちろんですが、自分が不在のときにいらした患者さんから会えなくて残念だったと言ってくれることもあります。忙しい毎日ですが、そのように信頼して下さる方々からいただく「ありがとう」という感謝の言葉が私の力になっています。

子どもの頃の入院がきっかけで薬剤師の仕事に憧れを抱くように。大学では仲間と学ぶ喜びを経験。

薬剤師の存在は小学生の時の入院をきっかけに知り、高校生になった時に本格的に薬学部を目指して勉強を始めました。北海道薬科大学（現・北科大）を選んだのは卒業後に臨床で活躍する人が多いと聞いたからです。在学中は同じ道を志す仲間と助け合いながら頑張れたおかげで、卒業試験も国家試験も無事に乗り切ることができました。当時に深めた絆は今でも続いていて、現場に出てからは多くの先輩・後輩が医療の世界で活躍していることも励みになっています。

卒業から15年。薬剤師生涯学習センター主催の講座で知識をアップデートし、時代が求める薬剤師像を再認識。

卒業から10年以上が経ち、その間に妊娠・出産も経験しました。1年ほどブランクがあり、最近6年制の学生の実務実習を指導することもあって最新の薬学教育を補完する必要性を感じていたところ、北科大の「薬剤師生涯学習センター」が職業実践力育成プログラム（以下BP）を開講するニュースを知りました。今年3月に修了したのですが、講義では抜け落ちていた知識を補完できただけでなく、日本医療の現状や薬剤師が置かれている状況、今後の国の方針についても学ぶことができました。また、今後

どの分野に注力していったら良いかを認識できたことが大きな収穫だったと感じています。

育児や家事で多忙な日々でも、学ぶ環境は用意されている。だからこそ自己研鑽は一生続けたい。

BPの講義を受講して感じたことは、今の北科大は私の在学当時と異なり、さまざまな学科の学生と交流する機会があるということです。とても魅力的に映りましたし、学校全体から活気を強く感じました。

薬の世界は日進月歩の勢いで進んでおり、薬剤師は、臨床現場に出た後も勉強し続けなければいけません。ですが、知識を増やせば増やした分だけ、患者さんの役に立つことができます。それは薬剤師としての大きなやりがいだと感じています。受講したBP以外にも、今はオンデマンドで参加できる学会なども増えていて、子育てしながら働く私にとってはありがたい限りです。私も学生と同じく今後も自己研鑽を続け、患者さんはもちろん、実務指導する学生にも有意義な知識を提供していけたらうれしいです。



2024年3月に職業実践力育成プログラム（BP）を修了

HUS 調査隊

このページは、学生記者が担当しています。

Q2. 誰にも教えたくない空きコマおすすめスポット

プロジェクトルームが人気！

HUS+H（図書館）

トレーニング室

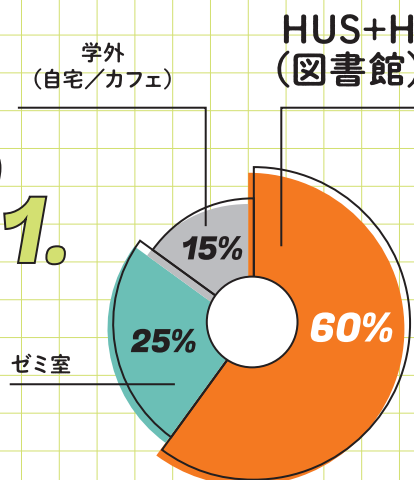
ゼミ室

E棟カフェテリア

調査隊も会議で使用しているプロジェクトルームや映画が大画面で見られるソフィアホールがあるのがHUS+Hの人気の理由!? トレーニング室は、カッコいい筋肉をつけるために通うストイックな学生に人気! 開放的なカフェテリアは友達とのお話にベストな場所!

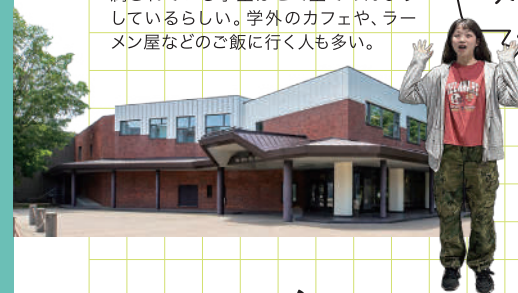


Q1. 空きコマはどこで過ごす?



去年、リニューアルされたHUS+H（図書館）が大人気! 他の図書館では見られない設備がたくさんある。ゼミに配属されている学生はゼミ室でのんびりしているらしい。学外のカフェや、ラーメン屋などのお飯に行く人も多い。

図書館が大人気!!



Q3. 自分だけの空きコマの過ごし方

A1. 友だちとトランプを楽しむ!

きっかけは「トランプだったら気軽にできる」と思ったから。トランプ以外のカードゲームをやることもあるそうで、トランプのカードをタロットカードのように見立てて占いやマジックをしたり、他のカードゲームに代用して遊んでいるようです!



A3. 車をカスタム!

幼少期から家族の影響で車が大好き! 大学生になって車を持ってからは、走ることはもちろん自分でカスタムもするように。空きコマの時間を有効活用してカスタムをしているようです。「安く楽しくカッコよく」をコンセプトに車と楽しく向き合っていました!



A2. ゼミ室でのんびり~

ゼミ室では、それぞれ自由な時間を過ごしていて、ゼミ室に来るために登校する学生もいます。作業や課題をしながら話し合ったり、お菓子を持ち寄って雑談をしたり...ゼミ生が過ごしやすくするために、工夫している人も多いです。



過ごし方は皆それぞれ!



取材して欲しいことなどみなさんの声を聞かせてください。



詳しくは、こちらまで!